慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十) : 弁長作『念仏往生修行門』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	三田國文 No.54 (2011. 12) ,p.37- 46
JaLC DOI	10.14991/002.20111200-0037
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20111200-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介（十）

――弁長作『念仏往生修行門』翻刻・略解題――

恋田知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『念仏往生修行門』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六―一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、おそらく同じ時期に書写された書物群と推察される。[1]

本書は、内容・奥書から、浄土宗鎮西派の祖、弁長（一一六二―一二三八）作『念仏往生修行門』の元和七年（一六二一）の写しと判断される。『念仏往生修行門』については、周知のように、『法然上人行状絵図』（以下、四十八巻伝）巻四十六に、聖光房弁長制作の書物として大意が記されるものの、これまでのところ現存は確認されておらず、散逸とされてきた幻の書物である。

浄土宗第二祖の弁長は、字を弁阿、房号を聖光房とし、もと天台僧であったが、都で称名念仏を説く法然に教えを請い、その後故郷筑前に戻り、法然相伝の教えを広め、鎮西義の一派を確立した。その著述も、『念仏名義集』や『念仏三心要集』、『浄土宗要集』など数多く伝存している。法然相伝の三心具足の心得を中心に三心の重要性を説いた『念仏往生修行門』は、四十八巻伝をはじめ、『聖光上人伝』、『帰命本願抄』、『円光大師行状画図翼賛』、『筑後善導寺誌』などにも書名が認められる。だが、四十八巻伝の記事以上に詳しいものはなく、いずれも四十八巻伝によったとみなされる。また、四十八巻伝に記された大意についても、『念仏三心要集』などの弁長の法語内容に共通しており、先行研究によっては、本書の存在そのものを疑問視する意見もあった。[2] しかしながら、この度の発見により、本作品の存在が明確となったわけである。

試みに、本書（陽明）と四十八巻伝（勅伝）の記事との対応箇所を示すと、以下のとおりである。[3]

◎陽明本五丁裏一一行目～七丁表一行目

陽明　この世の中のねんふつしやこ上人の御しゆとは申あいて侍れとも、上人
勅伝　世の中の念　仏　者　故上人の御流　とは申あひて侍れとも、上人
陽明　の御きにはつや〳〵あらさりし事ともあまた申みたれ侍ることこそ
勅伝　の御義には　なかりしことゝもを　申みたり侍　こそ

陽明　ふひんのしたいに侍れ。こ上人へんあにおしへたまふはせんたうの心は
勅伝　不便　の次第　に侍れ。故上人弁阿　にをしへ給し　は善　導の御心は
陽明　しやうとへまいらんとおもはん人はかならす三しんをくしてねんふつを
勅伝　浄　土　へまいらむと思　はむ人はかならす三心　具足して念　仏　を
陽明　申へきなり。三しんとは一にはししやうしん、二にはしん〳〵、三には
勅伝　申へきなり。
陽明　ゑかうほつくわんしんなり。一にししやうしんといふまことしく
勅伝　一に至　誠　心　と云はまことしく
陽明　わうしやうせんと思ひとりてねん佛をしやうしんとは申侍なり。
勅伝　往　生　せんとおもひとりて念仏を　申　也。
陽明　させるへつのやうなとあるへつのくそくの入にもあらす。ちゑさいかく
勅伝　のゆへにもなし。たゝいつわりかさりて人めはかりの申やうさうとく
陽明　こけのねんふつと申なり。しん中にかならすわうしやうせんと思ひて
勅伝　申はししやうしんくしたるへし。二にしん〳〵といふは露はかりも
陽明　二に　深　心　と云は
勅伝　ねんふつ□うたかふ心なくけつとしてわうしやうせんする、さやうと
陽明　おもひとりて、又我身はこれむこくのさいあくしやうしのほんふなり。
勅伝　我身は　罪　悪　生　死　の凡夫なり。
陽明　けつちやうとしてちこくにたすへきことをひやとうなきやうこうとくわ
勅伝　になんせる身なり。いかなるせんこんをはけむともさらにうたかふへき
陽明　やもなき身なりとおもひしるへし。しかるにみたかくわう大せんひ
勅伝　しかるに弥陀の　本
陽明　くわんのかたしけなきによつてこのねんふつをつとめいたらはしせんに
勅伝　願　のかたしけなきによりて
陽明　のちのあくこふほんなう一々にせうめつしてかならすしやうしゆのれん
勅伝　たいにさせん事きはまりなきよろこひかなとふかく思ひとりてこのねん
陽明　この　念
勅伝　ふつよりほかに我身のたやすくたすかるへきことはつや〳〵なしと
陽明　仏　より外　に我身の　たすかるへきこと　なしと
勅伝　かたくしんするをもつてしんしんと申也。へつのようなきなり。三
陽明　かたく信　するを　申也。　三に
勅伝　ゑかうほつくわんしんといふは、まさしくわうしやうせんと心さし申
陽明　廻向　發　願　心　と云　は、
勅伝　ねんふつを申なり。またへつのようなく、これはこれたゝ一すちにこく
陽明　たゝひとすちに極
勅伝　らくにわか身のまいらん　ため　なりとおもひたる。
陽明　楽　に　まいらむするための念仏なりと思をいふ也。
勅伝

◎陽明本七丁表八行目～七丁裏九行目

陽明　これをほうねん上人よりならいつたへたてまつりたる三心のしさいに
勅伝　これそ法　然　上人より　習　つたへたてまつりたる三心　にて
陽明　侍る。このほか　又　へつのやうなきなり。これらもこのむねを心えて
勅伝　侍る。この外　またく別　のやうなき也。

陽明　申させ給ふへし。たゝしねんふつのかすかんねんほうもんと申もんに
勅伝　すゝめていわく、もつはらみたのみやうかうをねんすること一まん二
陽明　まん三まん四まん五万六万七万八万九万十万へんなり。人のこんしやう
勅伝　にしたかいてこの中にいつれにも申へきなり。たゝし故上人申られしは
陽明　故上人の仰られ候しは
勅伝　なん女さいけにしてきゝてせけんにかへられてそのいとまなからん人は
陽明　のいとまなからむ人は
勅伝　一まんへんなとをも申へし。又さいけなりともそのいとまうちありて心
陽明　一万　二万なとをも申へし。
勅伝　さしふかゝらん人は三四五まんへんなと申へきなり。又そうやあまなと
陽明　僧尼なむととて
勅伝　のさまを　たらんしるしにはすくなからんちやう三まんないし五万六万
陽明　三万　六万
勅伝　さまをかへたらむしるしには
陽明　へんを申へし。このほかおほく申さんとおもわん人は七八まんもしは
勅伝　なむを申へし。
陽明　九十まんいかにも〳〵おほく申にすきたるほうもんはあるへからす。
勅伝　いかにも　おほく申すにすきたる法　門はあるへからす。

◎陽明本九丁裏五行目〜八行目

陽明　たゝせんするところこのねん佛はけつちやうわうしやうのきやうなりと
勅伝　詮するところ此　念　仏は　決　定　往　生　の　行　なりと
陽明　しんをとりつれはしねんに三心はくしてわうしやうするなとやす〳〵
勅伝　信　をとりぬれは自然　に三心は具足して往　生　するそとやす〳〵
陽明　とほうねん上人は仰られ侍しなり。
勅伝　と　仰られ侍しなり。

◎陽明本一二丁表六行目〜一二丁表一二行目

陽明　もしこれならわぬことをもならひたるといひ、ほうねん上人の仰られぬ
勅伝　もしこれならはぬことを　ならいたりといひ、　仰られぬ
陽明　ことをもおほせられたると申てひかめるやうにて人のためにはゝくろを
勅伝　ことを　仰　られたりと
陽明　も申物ならは三世のしよふつ十はうのほさつことに　たのみたてまつる
勅伝　申　侍らは三世の諸　仏　十方　の菩薩　ことにはたのみたてまつる
陽明　ところのしやかあみたくわんおんせいしせん道しやうりうねんふつしゆ
勅伝　所　の尺　迦　弥陀　観　音　勢　至　善導　聖　霊　念　仏　守
陽明　こほんてん大しやくの御あわれみなくしてけんせこしやうかなはぬ身と
勅伝　護の梵天　帝　尺等の御あはれみなくして現　世　後　世かなはぬ身と
陽明　なり侍らん。
勅伝　なり侍らむ。已上略抄上人口決の次第誓言嚴重なり。

以上、四十八巻伝所引記事との対応が認められ、末尾に「略抄」とあるように、四十八巻伝が『念仏往生修行門』から重要な箇所を略述した様がうかがい知れる。勿論、弁長作の原本から本書にいたるまで何段階もの書写を経ており、文意の通らない部分もある。また、本書七丁表三行目から七丁裏一一行目の記事については、続く八丁表一行目から八丁裏十一行目と重複しており、衍文とみなされる。だが、やはりこれまで散逸とさ

れてきた本作品の存在を確定づける点で、極めて重要かつ貴重な一本と言える。なお、書誌については、以下のとおりである。

・函架番号　近ト72へ
・形態　写本。一冊。仮綴。
・寸法　縦三一・六糎。横二三・六糎。
・表紙　本文表紙共紙。楮紙。
・丁数　墨付一三丁。
・本文　半葉一二行。漢字平仮名交じり。字高約二五糎。
・外題　なし。
・内題　「ねんふつわうしやうしゆきやうもん」
・奥書　「元和七年九月十日これをうつし候。かなつかいもわろく候へともほんのまゝかき申候。八十あまりの筆にて候まゝ、皆々御らんし候人々御わらい候はんすれとも、もしは念佛一へんも御たむけ候はんかとめもかすみふてもかなひ候はねともかきをき申候。」
・印記　一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。また、虫損等により判読不能な箇所については□と表記した。

注

（1）陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集　三弥井書店　二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町　物語草子論』笠間書院　二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編『お伽草子　百花繚乱』笠間書院　二〇〇八年）を参照されたい。

（2）『念仏往生修行門』について、『念仏三心要集』とみなした青柳英珊氏の見解（『鎮西上人』教学週報社　一九三二年）に対し、小西存祐氏は向阿の『帰命本願抄』に『念仏三心要集』と並列されていることから、本作品を『念仏三心要集』の姉妹編のごときものと想定された（「国師の著作」（柴田玄鳳編『三上人の研究』三上人遠忌事務局　一九三五年））。佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』（二〇一一年）参照。

（3）四十八巻伝の引用については、小松茂美氏編『法然上人絵伝』（続日本絵巻大成　中央公論社）所収の影印によった。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げる。

なお、本稿は科学研究費補助金　若手研究（B）（課題番号二二七二〇〇九〇）による研究成果の一部である。

【翻刻】

ねんふつわうしやうしゆきやうもんさくしやへんあ

それねふつ申てしやうとにわうしやうせんと心さし
あらん人は、このしたいをよくく心えてね佛を申へきなり。
しやうとをいつる事はきはめたる大しなり。わうしやうこく
らくによりてそ、この世の人のためにやすき事も侍へき。
わうしやうこくらくは、ねんふつによつてそ、いまのまんせの

つみふかきともからの身にたえたるきやうなる。そのゆへは、しやか如らいいてかたくして□させ給ふてみのりをとき給ふに、このしやは
せかいのむかいむさんのうかみかたきを、せめてもそかへんためにとき
たまへるみのりの中に、しやうともんのきうほうふかしきなるといへる、
しやうとの三ふきやうのなかに、ねんふつ申てわうしやうすへしといへる
ことをあかしたまへり。このみのりをたのみてしやうともんにいりてねん」（1オ）
ふつをふかくしんすへきなり。ほとけと申たてまつるもあ
はれみふかくおはします。しひのあるしのおしへをきたまへる
ねん佛のほうもんなり。しかるを、たいたうかんとにせんとおしやうと
申たてまつりし大し、まつせのなりくたれるとき、つみははや
ましにつもり、世中はたゝくたりにくたりて、せんには日々にしりそ
き、あくには夜々にすゝみて、十あく五きやくをつくりて、むけむ
地こくにしつみ、三あく道のすもりあるしにならんとする、しゆしやう
をあはれみて、まつほうのはしめに世に出させたまいて、何事をこんきやうす
とも、たゝ我おしへをふかくしんして、ねんふつの一きやうえかうをつとめ
として、まい日のしよさには、あるいは一まん二まん三まん四まん五まん
六まん七万八万九まん十まんへんなと申て、あさ夕おもひをこく
らくにかけ、心をかたちにすましてたのみをみたにあさからすねん仏」（1ウ）
をはしめてのちよりいのちおはるまておこたることなく
よく〳〵つとむ人は、かならすわうしやううたかいなき人なり。
ふかくせんたうをたのみたてまつり、そのおしへをしんすへきなり。
いかゝしんするとならは、わかてうあきつしまひゑさんほうとうゑんくろ
たにほうねん上人の御おしへに、心わくけんくらうせうなり
しとき、みまさかのくにほたいたとくけう御ほうにしたかいたて
まつりて、そのゝちくろたに上人をしとたのみたてまつりて、しゆく〳〵
のほうもんをならひて、此たひしやうし出さらむ事をなけき申せ
しかとも、我身にたへてつとむへきやうなかりしかは、なけき
かなしみて、この身をいかゝせんとおもひ、うつもれてとしころのし
しやうはしやうしいつへき事ともおしへたまはす。しかれは世の中にしやうし
出ることをおしたる人やあるとて、わらくつしはりはきてふりおひかた」（2オ）
にかけ、とうさいにはしりめくり、なんきやうほつ京にちへきはめ
たまへりときこえし人々に、いかにしてこのたひしやうとをはなるへ
きとたつねたてまつりしかとも、これこそしやうしはなるへききやう
よとけに〳〵しくおもゆる人なかりしかは、いかにせんとかなしみて
身をいたつらになし、この世をむなしくすくしてはうれへあるへき
事かなとかなしみのなみたをたれて、くわこおん〳〵のそのかみより
かくのことくむなしくすくしてけり。又この世をむなしくおくり
なは、大ちひむしゆこふもはるかなるへきことかなとかなしみて
三世にわつらい一しんにくるしまん事を思ひめくらすに、なみたもとゝ
まらすおほえて、さりとてやむへき事ならすとて、くろたにのほう
おんさうと申へきいきやうさうも入こもりて、一さいきやうをひらきて
我身にをこないてこのたひしやうしをいつへきほうやましますと　」（2ウ）
見侍りしほとに、もろこしにせんたうおしやうと申たてま
つるれは、ちやうあんしやうらくやうのみやこかうそくまうていより
はしめたてまつりて、くさ木のかせになひくかことくねんふつを
すゝめたてまつりて、しやうとのほうもんをつくりおきたまへる御しよ
のありけるを見いたして、我らはこれ十あく五きやくのあく人也。
かゝるあくこうしんちうの物のために、せん道おしやうの御おしへに
ねんふつ申てわうしやうすへしとあること、こせちよくせの我らか
身にたへたるつとめにてあるへかりけれと見さためおよひて侍り

とのたまへり。しかれは、これをこの世の人はふかくしんしてかな
らす一かうせんしゆほんくわんわうしやうのねんふつを申へし、
うたかいなきこと也とひろめさせたまふよしかをきもおもひて
この小そうへんあはそのかみてん大のおしへをならひろんきもんに　」（3オ）
かたとりてふつほうをいとなみあかしくらし侍りしほとに、した
しきとうほうのときうとかや申やまいを□るより□るまて
わつらひて、さるのときはかりにえいりして、ひともすまていきも
出すさりしを見侍りしに、なみたもとゝまらさりしかは、とし比
ならひたりしろんきのもんともとりをきて、ひとへにこくらくを心
さしてしゆ〳〵のつとめして一このおわりにかならすしやうとへわたらん
と心さしふかく侍りしあいた、さん上にてかくもんせしそのかみ後
のよをいとなみ給ふ上人の御なかに、ひゑさんほうとうゑんくろたにの
上人ほうねんの御はうと申人こそちへほからかにして後世の道をは教
あまた人にもといきゝみつからも一さいきやうさうに入こもりて一さいきやうを
みきはめたまふ事あまたたひあるなれ。そのきやうの中にとりて
しやうとの三ふきやうの中にあみたきやうと申かきやうとし、ろん　」（3ウ）
のなかにてんしんほさつのつくりたまへるしやうとろんを我ろんとし、
大たうのたいしの事にはせんたうおしやうをわかしとしたてまつり
て、くきやうかつこうしてしやうとのつとめも一すちに一かうせんしゆ
のあみたふつこそめてたきありかたきわうしやうこくらくのきやうとは
なり侍るなれとて、ゑんをむすひたてまつらんと思ひしあひた、きやうし
ゑまいらせ侍へきをことにそのきこえひろくなりたまへるにう
たう上人なむあみたふつと申てかたしけなくきゝたまひし
ひしり、ほうねん上人をしやうしたてまつりて大佛てん
のはんさくの木下をたうちやとしつらいて、十六さうくわんのたう
のまへしやうとの三ふきやうせんたうおしやうの御ゑいあはせて
三かてうのせんほうをねんふつをもつてしやくしをかいしに
ならのみやここくらくしとう大しのちしやともかしらそいつゝみ　」（4オ）
て、大しゆにたちなるかおの〳〵ちやうもんしてなみたをなかしあ
われみたつとみたてまつりて、あるひはすいきのきはまりなく
此たうしは我てう日本こくの人とはおほえす、さうらいしんら大たう
のしやう人か、あるひは大こんのほさつのけしんかとあやしみたつとみ
のゝしるほとこそあれ、ならのきやうおしなへてたいらのきやうさまに
ちへある人の物をきくをよくるちやうそうそくをいわすゆゝしく
たつとみたてまつりしほとに、きた山のかた大はらと申所は
みやこといひ、まことに後世をおもふ人々ろうきよしたまへるとこ
ろなり。かの所にてん大さすちうなこんほういんけんしんの御はうとて
ほとけかと申人のおはせしか、とう大しの上人をよひたてまつり
てつかいとしてほうねん上人をしやうしたてまつりて、ねんふつ
ほうもんをよく〳〵たんして、たつとくめてたく侍る事なりとて　」（4ウ）
いまよりいこ一かうにねんふつにきしたてまつらんとてした
しきしゆうのきやうをすてゝ、たゝ一すちにねんふつを申させ
たまいき。これよりのちはゆめ〳〵うたかふ人あるへからす。我てうには
さすかけんしんとけんくう上人とたんしたまいて、まんせ
させんかためにひろめたまへるねんふつのほうもんなるを、いつれの人か
ほんいをいたし、うたかいをなすへきや。もしきはうのともからあらは
ふかくおもふへし。一にはくちのいたり、二にはけたうのしよい也とてきやう
たうねんふつしたまふへき。これこそ我てうの一かうせんしゆのねん
佛のはしめなりけれ。このよしをきゝおよひて、ほうねん上人お
しやうしたてまつりて、さかのみとうやうつまさにむわいちきよ水

なんとにてこそせんしゆのねんふつほうもんをとかせまいらせ、これほと
たつときも何事といふとも侍らしとのゝしりあへるほとに、九てう殿」（5オ）
くわさんのゐん殿、とく大し殿、かゝるやことなくちへかしこく
おはしますとのゝ、ねんふつもんにいらせたまふあひた、我も〳〵
おとらしまけしときせんねんふつにいらせ給ふよし、こ
の小そうへんあはきゝつたへて、しやう人のよしみつといかにとむま
のときはかりにとひたてまつりて、たゝしはしと思ひしほとに
ひつしのときはかりまて、上人もこたへみつからもむかいたてまつり
てうけたまはり、おもふになみたもとゝまらす、あはれにたとくお
ほえ侍りしかは、そのつきの日より上人にしたかいたてまつり
て、しら川のほとりにさうあんをむすひて、あさ夕しやう人の御あん
しつをすみかとしてならひつたへ侍る、一かうせんしゆのねん
ふつなる。しかるに、この世の中のねんふつしやこ上人
の御しゆとは申あいて侍れとも、上人の御きにはつや〳〵あら　」（5ウ）
さりし事ともあまた申みたれ侍ることとこそふひんのした
いに侍れ。こ上人へんあにおしへたまふは、せんたうの心はしやうとへま
いらんとおもはん人はかならす三しんをくしてねんふつを申へ
きなり。三しんとは一にはしやうしん、二にはしん〳〵、三にはゑかう
ほつくわんしんなり。一にしやうしんといふまことしくわうしやう
せんと思ひとりてねん佛をしやうしんとは申侍なり。させるへつ
のやうなとあるへつのくそくの入にもあらす。ちゑさいかくのゆへ
にもなし。たゝいつわりかさりて人めはかりの申やうさうとく
こけのねんふつと申なり。しん中にかならすわうしやうせんと思ひ
て申はしやうしんくしたるへし。二にしん〳〵といふは露はかりも
ねんふつ□うたかふ心なくけつとしてわうしやうせんする、さやう
とおもひとりて、又我身はこれむこくのさいあくしやうしのほんふ　」（6オ）
なり。けつちやうとしてちこくにたすへきことをひやとう
なきやうこうとくわになんせる身なり。いかなるせんこんを
はけむともさらにうたかふへき、やもなき身なりとおもひしる
へし。しかるにみたかくわう大せんひくわんのかたしけなきによつ
て、このねんふつをつとめいたらは、しせんにのちのあくこふほん
なう一々にせうめつして、かならすしやうしゆのれんたいにさせん
事きはまりなきよろこひかなとふかく思ひとりて、このねん
ふつよりほかに我身のたやすくたすかるへきことは、つや〳〵なし
とかたくしんするをもつてしんしんと申也。へつのようなき
なり。三ゑかうほつくわんしんといふは、まさしくわうしやう
せんと心さし申ねんふつを申なり。またへつのようなく、これ
はこれたゝ一すちにこくらくにわか身のまいらんためなりとおもひ　」（6ウ）
たる。これをゑかうほつくわんしんといふ也。せんするところこの世
をいふをもつてしやうしんといひ、ねんふつをたつときこと
なりとしんするをもて、しんしんといひて、こくらくをねかふをもつ
てゑかうほつくわんしんといふなり。ゑとをいとわすしてしやうとを
もとめは、ともつなをとらすしてふねをこくかことし。ねんふつ
をしんせすしてわうしやうをこふるは、くらき道にとほし火を
けしたるかことしといへり。これをの〳〵しるをせんたうおしやうの
三しんとは申なり。これをほうねん上人よりならいつたへたてま
つりたる三心のしさいに侍る。このほか又へつのやうなきなり。
くれ〳〵もこのむねを心えて申させ給ふへし。たゝしねんふつ
のかすはかんねんほうもんと申もんにすゝめていわく、もつ
はらみたのみやうかうをねんすること一まん二まん三まん四まん　」（7オ）

五万六万七万八万九万十万へんなり。人のこんしやうにしたかいて
この中にいつれにも申へきなり。たゝしこ上人仰られしは、
なん女さいけにしてきゝてせけんにかへられてそのいとまなからん人は
一まんへんなとをも申へし。又さいけなりともそのいとまうちあり
て心さしふかゝらん人は三四五まんへんなと申へきなり。又そうやあまなと
のさまをたらんしるしにはすくなからん、ちやう三まんないし五万
六万へんを申へし。このほかおほく申さんとおもわん人は七八まん
もしは九十まんいかにも〳〵おほく申にすきたるほうもんはある
へからす。たゝしないし十ねんといひ、もしは三ねん五ねんふつらいかう
ともあかし、一ねんしやうしをそくとくわうしやうとものへたるは一し
やうさうあくのともからのねんふつといふ事とうち物にして
あやまてこれをきけはれうかなはす物あしくうちかみと　」（7ウ）
〔以下、8ウ11行目まで重複〕
しやうしんといひ、ねんふつをたつときことなりとしんするを
もつてしんしんといひ、こくらくをねかふをもつてゑかうほつ
くわんしんといふ也。ゑとをいとはすしてしやうとをもとめはとも
つなをとかすしてふねをこくかことし。ねんふつをしせすしてわう
しやうをするはくらき道にとほし火をけしたるかことしといへり。こ
れおの〳〵しるをせんたうおしやうの三しんとは申なり。これを法
ねん上人よりならひつたへたてまつりたる三心のしさいに侍る。此ほか
又へつのやうなき也。くれ〳〵もこのむねを心えて申させ給ふへし。
たゝしねんふつのかすはくわんねんほうもんと申もんにすゝめて
いわく、もつはらみたのみやうかうをねんすること一まん二まん三
まん四まん五まん六まん七まん八まん九まん十まんへんなり。
人のこんしやうにしたかいてこのうちにいつれにも申へきなり。　」（8オ）
たゝし故上人おほせられしは、なん女さいけにして思ひきらふ
そのいとまなからん人は一まんへんなとをも申へし。又さいけなりとも
そのいとまうちありて心さしふかゝらん人は三四五まんへんなと
申へきなり。又そうやあまなとのさまをかへたらんしるしにはすく
なからん、ちやう三まんないし五六まんへんを申へし。このほかおほく
申さんとおもわん人は七八まんもしは九十まんいかにも〳〵おほく
申にすきたるほうもんはあるへからす。たゝしないし十ねん
といひ、もしは三ねん五ねんふつらいかうともあかし一ねんしやう
しをそくとくわうしやうとものへたるは一しやうさうあくのともからの
ねんふつといふ事とうち物にしてあやまてこれをきけは、れう
かなはす物あしくうちかみとかんなといふ人のさいこりんしゆ
のときせんちしきのすゝめによてかくのことくならひて、そのゝち　」（8ウ）
やかてあくをつくらておわるにいたての事也。ねんなとなつけ
てかひ南無阿弥陀佛と申てそのゝちもしは十ねん廿ねんかあひた
しんまんこふ四あくせつしやうちうたうをことゝし、我は此一ねん
をとなへたりしかは、わうしやうせんするそといひたらん事これ
かはしんすへき下かふてそうやあまをすゝめ給ふちやう三まんへん
申せと上人のたまいし也。しからはせん道のしやくにいわく、あるいは
三万六万をゑしはみなこれ上ほん上しやうの人なりとしかれは
すなはちおなしくは上ほん上しやうを心さして申へきなり。かやう
にしるし申斗はねん佛のきを人にかへていひみたすあひた十
人は十にへんして百人はひやくきゝて人をまとわすなり。たゝひとへ
にねんふつをやめんためのけたうのしよい也。たゝし古上人は
世にやすくこそねん佛をはかみそんにおしへたまいしか、されはこそ」（9オ）
くに〳〵よりまいりてねんふつをうけたてまつりつる人々も

心やすくおもひ侍しことなり。いわんや大はらの松おしやう御をう
ほとのやことなきちしやもまことにめてたかりける事かな
さけをはせさせたまいし事なり。このむねを心えん人々は世に
やすくおもふへきことなり。たゝせんするところこのねん佛はけつ
ちやうわうしやうのきやうなりとしんをとりつれはしねんに三心
はくしてわうしやうするなと、やす〳〵とほうねん上人は仰られ侍し
なり。かやうに思ひとりてたゝねんふつの数おほく六七万へんも申人は
百人なからわうしやうすることうたかいなし。せん道もしやくせ
させたまへりとて、ほうねん上人は日へつにつとめに七まんへんを申
たまいきはこたにのあまこせんは十万へん申させたまいしを世の中
のたつとき人なり。ありかたき事にせさせたまいしなり。この　」（9ウ）
世の中の人のねふつにはたゝねんなといひて人をいたつらに
なす事ふひんのことに侍れ。又ねん佛をうたかへはこそつみ
をはつくらさらめといひ、なやましてもとよりはか〳〵しくは
なきつみことをいよ〳〵あくこふふかき物にすゝめなすこと
のあさましさ三しんをもやう〳〵おしへなしてかいしやくかま
しくちしやのふるまいすることむけまきれる心也。ねんふつの
きをくきりやうにはいわしなんといひて心にくかほにことあり
かほなることむこくのきやくさいなり。これていのことゝよをさう
とくこけの人とはなつくる也。又めてたき事ありとて人にはかくれ
へたつるなといひて心さしある人にはせいもんきしやうをかゝせてゆる
すなといふ。さることやあるへきせんたうおほくのふみをつくり
たまいてしやうとしうとなつてまつせのいかならん人もわうしやう　」（10オ）
心さしあらん人はこれによりてしやうしをはなれ、しやうとへま
いれとてひろめおしへおきたまへる。ほうねん上人はなんほく二きやう
のそこはくのちしやくやきせんらくせうにしてのゝしりひろ
めたまへるねふつわうしやうのほうもん也。ほとけはこれらの人をかきらい
いつれの物をかきらいたまへる、たゝ十はうしゆしやうをしつかはねん
ふつをしんしてこくらくへまいれと仰られたるに、たれかは十万より
ほかの人まてきらいへたてたるへきや。させる人にかくすなといふ事は
しんこんと申ほうもんこそみつけうなと申めれ。又ろんきの
中にこそめてたきひきなと申斗も侍れ。まことにいまこれねん
ふつと申はまつ代あくせのこのころむにんむさんのなん女くちむち
のあまや入道のいかにしてもしやうしをはなるへきやうもみえぬ物を
あわれみたまいて、大たう上人せんたうおしやうねんふつくわんしんの」（10ウ）
ふみをつくらせたまいてこれをすゝめ給ふ。我てうほうねん上人はこんと
しやうしをはなれん事をいかゝせんとなけきかなしみ給
いてみいたしたまへるほうもんなるを我ことくにしやうしを
出よとまんせのしよ人はたゝ一すちに思ひとりてせん道の御すゝめ
のねんふつを申をこそ人をきらはすおしへたまへることなれ。又物の
かすならねともこのこそうへんあもまんせのあま入道むかいむ
さんのなん女けたうむこくのともからなりとも、まことしく思ひ
とりて、わうしやうねかわん人はかくのことくのしたいを心へてこほう
ねん上人の御すゝめをしんして、ねんふつのかすをほからかに
申て、りんしゆしやうねんわうしやうこくらくと心さし給へと、はる〳〵
とつたへをき侍らんためにいきをしるし申ところなり。しよせん
まつせの人々よく〳〵しんすへし。せん道はそれたれそや、すな　」（11オ）
わちさいほうこくらくのけうしゆあみた佛まつせのほんふの
きにさうおうしたまわんために、人とけんしてかりにせん道
と申なをつき給へる。一さいのわれらことき一しやうさうあくのとも

からを、おやの子をおもふことくあはれみたまはんかために、このなん
きんふたいにいてたまいて、くわんきやうのしよならひにおほくの
ねんふつのくわんしんのふみとかをけんさいにせうするをゑて
つくりをきたまへり。しやうとしうをたてたまふに、大たうもろこし
まてはおほくの人をりやくしたまいて、かりにわうしやうのよしをしめして
日本こくにわたりては、ほうねん上人とあらはれたまへるよし、やんこと
なきちしやたちあまたかしこく人のせいきよにゆめのつけ
そのかすきこえたまへり。御ことなりたやすくほめもそしりも
したてまつるへきにおよはぬ事也。ひとへにこくらくのあみたほとけ」（11ウ）
おはしませる事なれは、あらたにこくらくわうしやうせんと
心さしあらん人は、ふかくかのつたへをまさにたもちてしんすへき也。
しかれはすなはち、こくらくにてはあみた、大たうにてはせんたう、
我てうにてはほうねん上人といはれたまへり。さらにしりぬ三しやう
一心にして三こふのねん佛をすゝめたまへりといふことをふかくしん
して、一すちにねんふつおこたるなかるへし。もしこれならわぬことを
もならひたるといひ、ほうねん上人の仰られぬことをもおほせられ
たると申てひかめるやうにて人のためにはゝくろをも申物ならは
三世のしよふつ十はうのほさつことにたのみたてまつるところ
のしやかあみたくわんおんせいしせん道しやうりうねんふつしゆこ
ほんてん大しやくの御あわれみなくしてけんせこしやうかなはぬ身と
なり侍らん。まんせむちの人をあわれみてその時をまといしたてまつらし」（12オ）
とてかやうしるしおくところなり。ゆめ〳〵うたかいをなす事
なくして、ねんふつの数おほく三四五万へんなとかけてりんしう
しやうねんわうしやうこくらくとねかいたまはん人々は、うたかいなき
わうしやう人にておはしますへきなり。これみたのほんくわんにも
かなひ、せん道御あはれみにもさうおかし、ほうねん上人の心にも
かなひ給ふへし。日本こくのちしやと申大はらのおしやうの
かうやのそうつ御はうのことくの人々はみな六万へんなり。こほう
ねん上人の御はうははしめは六まんへん後には七万へんなり。せ
けんにのゝしりたまへるやんことなき人々はみなかすをとりてねん
ふつ申てりんしうをいのり給ふなり。世にきこえぬ物も□とう
とりんしうをいのらすともとたてつるは、くちのいたりふたうのおこり
いにしへもそむき人ににぬきやうはらのことそてんまのくるはし　」（12ウ）
まゑんのしよいなり。はなはたみゝにきゝ入す、よく〳〵こゝろ
をしつめてあんすへし。わうしやうほとの大しにおもひかゝるはかりの
人のむなしくねふりいて、我はこれねんの物なれん。わうしやう
うたかいなき身なりといふ事、まことしからぬ事なり。

元和七年九月十日これをうつし候。かなつかいもわろく候へともほんのまゝ
かき申候。八十あまりの筆にて候まゝ、皆々御らんし候
人々御わらい候はんすれとも、もしは念佛一へんも御たむけ
候はんかとめもかすみふてもかなひ候はねともかきをき申候。」
（13オ）